

手話言語とろう者社会

加藤 三保子

1. はじめに

音声言語と手話言語のちがいは、概念を調音によって表現するか、手指を中心とする身体の手操作によって空間に転写するかの違いであり、概念を表出できるという点では何ら違いはない。手話は音声表現を欠くという点を除けば、他の自然言語の特徴をすべて備えているが、その言語体系はまだ解明されていない部分が多い。そのため、言語としての手話の地位はまだ低く、手話が聴覚障害者の母語であるという社会的認識も不十分である。しかし、近年では、特にアメリカや北欧から手話とろう者に関する実践的研究の成果が伝えられるようになり、日本国内においても「ろう者の言語と文化」に関する意識が高まりつつある。また同時に、言語学や教育学、心理学、脳科学など、手話を研究する専門領域は広がりつつある。

本稿では、手話という言語の特徴について述べるとともに、母語である手話を第一言語とし、手話で教育を受けたいと願うろう者社会の現状に触れ、「言語的・文化的少数者としてのろう者」について考察する。

2. ろう者とは

聴覚障害者自身や手話研究者らは、聴覚に障害をもつ人のことを「ろうあ者」ではなく「ろう者」と呼ぶ。それは、聴覚障害者は「聞こえない」（すなわち「ろう（聾）」である）が、「話すことはできる」（「あ（啞）」ではない）からである。もちろん、ろう者は自らが発した声をフィードバックして聞くことができないために、根気強く発声・発話練習をしないと第三者にわかるような明瞭な発音はできない。このために、ろう学校やろう児をもつ家庭では熱心に発話練習をおこなうのである。

広義のろう者とは、重度の聴覚障害（1～3級）をもち、手話などの視覚的なコミュニケーション手段によって日常生活を送る者をさす。狭義のろう者とは、音声言語の基本的概念を習得する以前に重度の聴覚障害をもち、手話を第一言語とする者である。（米川、2002）

アメリカでは1990年に「障害をもつアメリカ人法」が制定され、ろう者から「障害」(disabilities)でなく、「違った能力」(different abilities)を有する者と認識してほしいという要望が出された。このようなアメリカのろう者の活発な運動に影響され、日本でも若いろう者を中心に「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す言語的少数者である」（木村、市田、2000）という考えが支持され

ようになってきた。つまり、ろう者に対する視点が「障害者」という病理的視点から、「日本手話を日常言語として用いる者」という社会的・文化的視点へと転換されてきたのである。

3. 手話はどのような言語か

3-1. 手話に対するさまざまな誤解

日本では、1970年ごろまで手話は言語とは認識されず、学校教育で手話を使用することは以下のような理由で敬遠されていた。

- (1) 手話はジェスチャーやパントマイムと同じであり、抽象的な概念を表現できない
- (2) 手話は音声言語に比べて語彙数が少ないので、言語としては未熟である（日本最大級の『日本語-手話辞典』に掲載されている手話語彙数は約8,200語である）
- (3) 手話と音声言語は語順が異なるので、日本語の正しい語順の習得の妨げになる（例：「あなたは何が食べたいですか。」は、日本手話では「あなた」「食べる」「好き」「何」という語順になる）
- (4) 日本手話では助詞や助動詞が表現されない（例：「私は東京へ行きます」は、日本手話で「私」「東京」「行く」と表現するだけである）
- (5) 手話表現では動詞と名詞の区別ができない（例：「食事」と「食べる」、「雨」と「雨が降る」などは表現が同じ）
- (6) 幼児期に少しでも音声を獲得させておかないと、日本語の獲得が困難になる
- (7) 音声日本語を使用しないと、日本人としての文化を共有できない。

しかし、これらの判断はいずれも手話の言語特性を正しく理解していないことから生じた誤解である。たしかに、ろう者は助詞や助動詞を日本語のような形式で表現することはないが、手指と顔の表情、そして空間を多面的に利用してあらゆる概念を身体で表現することができる。手話の語彙数が音声言語の語彙数にまで達していないのは事実であるが、それはこれまでのろう者の生活に、音声言語に対応するだけの語彙を使用するニーズがなかったからであり、手話言語が音声言語に劣るための結果ではない。このように考えると、一般社会における「言語＝音声言語」という観念が長年にわたり手話をろう者の日常生活（特に教育の現場）から排除し、ろう者から母語を奪う結果となったことは否めない。

3-2. 手話とジェスチャーの違い

手話はパントマイムのように事物や行為を描写するのではない。そのような側面もたしかにみられるが、それは付随的な役割である。また、手話語彙のなかには、健常者が日常生活で使用するジェスチャーもある程度含まれているが、ごく少数にすぎない。しかも、これらのジェスチャーが手話として使われると、さらに広い意味とはたらきをもってくる。たとえば、下の図1で示すように、「お金」（親指と人差し指で輪をつくる）は日本手話でも日本人の一般のジェスチャーでも同じしぐさであらわす。しかし、ジェスチャーの「お金」がこれ以外の意味を伝達しないのに対して、手話の「お金」は他の要素と組み合わせさせて以下のようにさまざまな意味を伝えることができる。

- (1) 高い：右手に作った「お金」を下から上にあげる。

- (2) 高い：右手に作った「お金」を上から下へ降ろす。
- (3) インフレ：両手に作った「お金」を徐々に斜め上方へあげる。
- (4) 金持ち：両手に作った「お金」を肩の上から弧を描くようにしながら前方へ降ろす。(お金で懐がふくらんでいる様子)
- (5) 経済：両手に作った「お金」をからだの前で交互に水平に回す。

このように、「お金」という手話は、動きや場所を変えたり、他の手話と組み合わせることでより複雑な語彙を形成している。すなわち、手話は運用の過程で写像性を脱し、恣意性を獲得したといえる。一般のジェスチャーがノンバーバル（非言語）であるのに対して、手話がバーバル（言語）として機能しているのは、上記のような手話の語構成をみると明らかである。

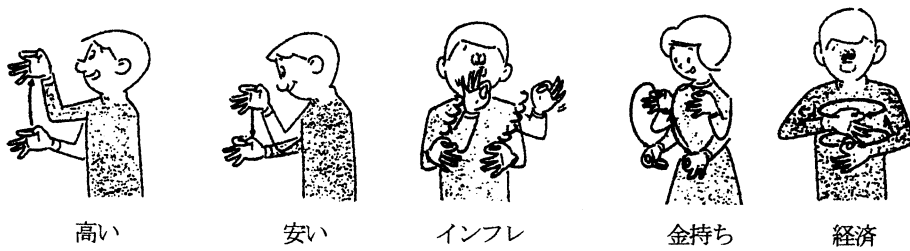


図1. 「お金」を使った手話語彙の例

3-3. 日本手話語彙のなりたち⁽¹⁾

日本手話の単語のなりたちは、おおむね次のように分類できる。

- (1) 一般のジェスチャーを利用するもの (例：お金／女／男／さようなら)
- (2) 実在するものの外観や動作を写像するもの (例：木／魚／犬)

「木」は両手で木の幹の形を、「魚」は開いた手を魚に見立て、手をくねらせながら動かして魚が泳ぐ様子を表現する。「犬」は両手を頭の横に置き、耳の形を描写する。

- (3) 漢字の外形を表現するもの (小／中／北)

図2で示すように、両手の手指を使用して漢字の形を描写する。

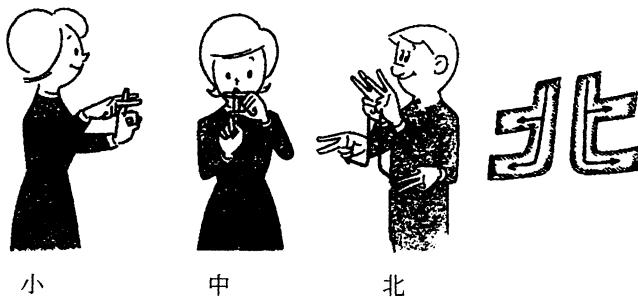


図2. 漢字の外形を表現する例

(4) 漢字そのものの意味を表現するもの(上手/土曜日)

「上手」は「上」と「手」という字を書くので、この二つの漢字の意味のとおり、上腕を肩から手首の方へ撫で下ろす。「土曜日」は指先で「土(つち)」をつまむしぐさで表現する。

(5) 日本語の身体表現を記号化するもの(待つ/苦しい/責任)

「待つ」は右手の甲を顎の下に当てて「首を長くして待つ」様子を示す。「苦しい」は指先を曲げた手を胸に当てて回す。これは、苦しみで「胸をかきむしる」様子をあらわす。「責任が肩にかかると」という表現があるので、「責任」という手話は指先を曲げた手を肩に置く。

(6) 語の概念を空間に転写するもの(関係/わかる/癖)

「関係」は両手に人差し指と親指で輪をつくり、この輪をチェーンのようにつなぐ。これは、二つのことがらが連結していることを示す。「わかる」は開いた手の平をのど元に当てて下に撫で下ろす。これは、ことがらが飲み込めたことを示す。「癖」は開いた右手を閉じながら左手の手首に当てる。これは、癖が自分の身体にしみこんでいくことを示す。(手首でおこなうのは、「手癖」ということばがあるためと思われる。)

3-4. 日本手話の表現様式

手話には音声言語と同様に、地域、社会階層、男女、世代の違いなどによる表現差異が存在する。さらに、ろう者と健聴者が表現する手話のタイプには「日本手話」「音声言語対应手話」「中間型タイプ」という3つの変種がある。

(1) 日本手話 (Japanese Sign Language)

日本手話は、ろう者のコミュニティーで自然発生的に生まれたものであり、独特の構造をもっている。音声日本語の影響がないわけではないが、語順や表現などはかなり異なっている。日本語の助詞や助動詞といった機能語はほとんど表示されない。このタイプは、先天的ろう者や手話に非常に堪能な健聴者が表現する傾向にある。

(2) 音声日本語対应手話 (Manually Coded Japanese / Signed Japanese)

音声日本語対应手話(同時法的手話: Simultaneous Communication (シムコム)とも呼ばれる)は、手話の語順や表現法が日本語化されたタイプである。日本語で表現する要素はできるだけ手話でも表現することを念頭においた様式であり、手話を学習する健聴者が日本語を発話しながら(日本語に当てはめて)手話表現するタイプのものである。ろう者が語る自然な手話表現とは異なるので、ろう者どうしではこのタイプの手話をほとんど使用しない。しかし、ろう教育のなかで日本語の効果的な学習を促進するために使用する場合は有効となる。

(3) 中間型タイプ (Pidgin Sign Language)

中間型タイプは日本手話と音声日本語対应手話の中間的なものであり、比較的音声日本語に準じた語順で表現されるが、ろう者の自然な手話表現が多く取り入れられている。ろう者が健聴者に手話でコミュニケーションする場合や、初・中級レベルの手話通訳者が表現することの多いタイプである。

ここで、「夏休みには京都に行って、お寺を見たり、小さい時に遊んだ友達と会うつもりです」(田上、

森、立野 1980) という表現を例にし、それぞれ日本手話、音声日本語対应手話、中間型タイプの3種類で表現した場合にあらわれる単語と語順のちがいを表1で示す。実際の手話表現は、稿末の図3-1, 3-2, 3-3にイラストで示す。

表現様式	表現される単語と語順
日本手話	夏休み/に/は/京都/に/行く/お寺/を/見る/た/り/子ども/の/時/に/遊ぶ/へした/友だち/と/会う/考える/へです/
音声日本語対应手話	夏休み/京都/場所/行く/お寺/見る/会う/男/彼(指差し)/子ども/時/一緒に/遊ぶ/
中間型タイプ	夏休み/京都/行く/お寺/見る/子ども/時/遊ぶ/友だち/会う/考える/

表1. 3つの表現様式による手話表現のちがい

4. ろう児の言語習得

日本では現在、ほとんどのろう学校で指導言語に音声日本語を採用しており、ろう児には幼児期から日本語の発話(発語)訓練がなされている。音をベースにして日本語を獲得させようというのであるが、もともと音声による情報の受信・発信が困難なろう児にとって、「聞く」「話す」に重点をおいた指導法は想像以上にストレスを与えるものである。

最近では、1993年に文部科学省(当時は文部省)の諮問機関が『聴覚障害者のコミュニケーション手段に関する調査研究協力者会議報告』で手話を言語と認識し、ろう学校で手話を補助的に使用することを容認したこともあって、手話を教育の場に取り入れようとするろう学校も出始めた。しかし、ほんの一部のろう学校で、ごく一部の教師が取り組み始めたばかりであり、学校全体でこの方針をとっている例はまだない。依然として音声日本語が指導言語の主流となっているのが現状であるが、このような状況は日本だけでなく世界各国で共通している。⁽²⁾ 手話が音声言語に劣るものであり、手話使用がことばの獲得の妨げになるとする考えはいまだに払拭されていないのである。しかし、近年の脳科学や認知言語学の分野における研究では、手話がれっきとした高度な人間言語であることを科学的に証明している。

言語脳科学の専門家、酒井ら(2005)は、機能的磁気共鳴映像法(fMRI)で脳を観察することにより、手話を理解するときに、日本語音声を聞くときと同じ脳の部位(左脳)が活性化することを突き止めた。これにより、手話は意思疎通の単なる伝達手段のひとつではなく、日本語や英語と同様の高度な言語であることがわかった。酒井は、「手話にも音声言語と同じ神経基盤があることがわかった。ろう教育では手話を身につけさせたのちに、第二言語として日本語を学ぶべき」と述べ、ろう児の第一言語を手話とすることの重要性を強調している。

また別の研究では、言語の習得に聴覚が不可欠ではないことも明らかとなっている。正高(2001)によると、聴覚障害児と健聴児の言語習得過程を観察したところ、喃語の出現の段階で両者の間に決定的な差が生じてくることがわかった。耳のきこえない赤ちゃんも、生後6-7ヶ月になれば「アー、アー」

と声を出すようになるが、8-10ヶ月を過ぎても「ダ・ダ・ダ」「バ・バ・バ」と言うようにはならない。子音を作り出すには、口腔や舌の形を複雑に変化・運動させなければならないが、それには周囲の声をモデルにしてこれをまねることが不可欠である。耳が聞こえないと、そのモデルを得られないので子音を出せるようにはならない。しかし、ヒトの脳は、子音を発声できないと判断するやいなや、まるでスイッチが切り替わるかのように、手話を使ってことばを表出しようとするのである。

このことを証明する事例として、正高は武居が先天性ろう児を観察した例を紹介している。(正高、2001)先天性ろう児が「自動車」のサインを形成していくまでの過程では、最初は両手を握りしめて胸元で手首を同時に反転させるしぐさをしたが、やがて左右のこぶしを上下させるようになり、最後にはおとながするようにハンドルを回すしぐさに移行していった。このように、聴覚が閉ざされたことによって発声ができないろうの赤ちゃんは、聞こえる赤ちゃんではあり得ないような複雑なパターンの手の動きを見せるのである。カナダのマギル大学のペティト (L.A.Pettitto) らは、このようなろうの赤ちゃんの手の動きを「手による喃語 (manual babbling) と呼んでいる。(Pettitto, 2000)

5. ろう者とアイデンティティー

ろう者は、ことばも文化も健聴者とは異なる。ろう児はやがて成人ろう者になるのであって、たとえろう学校で十分な学力と口話力を身につけて社会に出たところで、音が聞こえるようになったわけではない。したがって、ろう者は聴者のことばと文化を学びながらも、ろう者として手話と「ろう文化」を大切に、ろう者としてのアイデンティティーをしっかりと身につける必要がある。ろう者には、手話使用者が共通にもつ意識的な行動パターン、思想、価値観、思考の体系がある。ろう者がろう文化を意識し、これを伝承していくことには次のような意義がある。

(1) 「ろう文化」という共通の文化をもつことで、ろう者どうしの結束がよりいっそう強くなる。

(2) 健常者が「ろう文化」を知ることにより、ろう者が言語的・文化的に自立していることが確認される。

(3) 健常者の文化とろう者の文化の融合により、日本の文化が豊かさを増す。

文化適応能力は幼少期から活発に機能し始めるので、特にろう学校では人間性豊かな子どもを育成するためにも、異文化理解教育の一環として早期からこのテーマに触れるべきであろう。

日本では、ろう児の親たちによって「全国ろう児をもつ親の会」が組織されているが、2002年10月にはろう者の言語と文化を保障するという強い意志のもと、親の会が以下のような「ろう児の人権宣言」を発表した。

*ろう児は将来ろう者となります

*ろう児とろう者の母語は日本手話です

*私たちは子どもの母語環境を保障し、母語で教育を受ける権利を保障します

*書記日本語を第二言語とするバイリンガル教育を推進します。

*ろう児をろう児として育てたいのです

*人としてろう者としての誇りを大切にしてほしいのです

*私たちはろう児とろう者の文化があることを理解します。

*「聞こえないこと」は不幸ではありません

*私たちはろう児の人権を守ります。

親の会では、これをもとにして2003年5月に日本弁護士連合会（日弁連）に人権救済の申し立てをおこなった。日弁連ではこれを受けて、2005年2月に「手話教育の充実を求める意見書」をとりまとめ、文部科学省に提出した。今後はこれに対する政府の見解が注目される。

6. おわりに

ろう者が抱える問題はさまざまであるが、特に手話の社会的認知はろう者にとって大きな問題になっている。日本では、一般社会で手話を言語と認識するようになってからまだ日が浅く、日本手話に関する言語特性についても未知の部分がたくさん残されている。また、ろう者は、マイノリティーとマジョリティーの間に生じる他の例と同様に、「健聴者優位（音声言語優位）」の社会に生きる言語的・文化的少数者であるが、日本社会にはこのような認識がまだ不十分である。そのため、ろう者は健聴者と対等の立場で社会参加できておらず、学校教育においても手話が指導言語として公的に使用される環境は整っていない。

今後は日本手話の文法構造の解明、手話語彙の拡大、手話文字の研究、手話の普及と変容の諸問題などに関してさらなる研究を継続しなければならない。また、日本文化、日本語を背景としない帰国子女や在日外国人などのことばと文化に関する研究の中に、新たにろう者とろう文化の問題も含まなければならない。この問題は異文化理解教育や異文化コミュニケーションなどの専門分野で取り上げられるべきであろう。

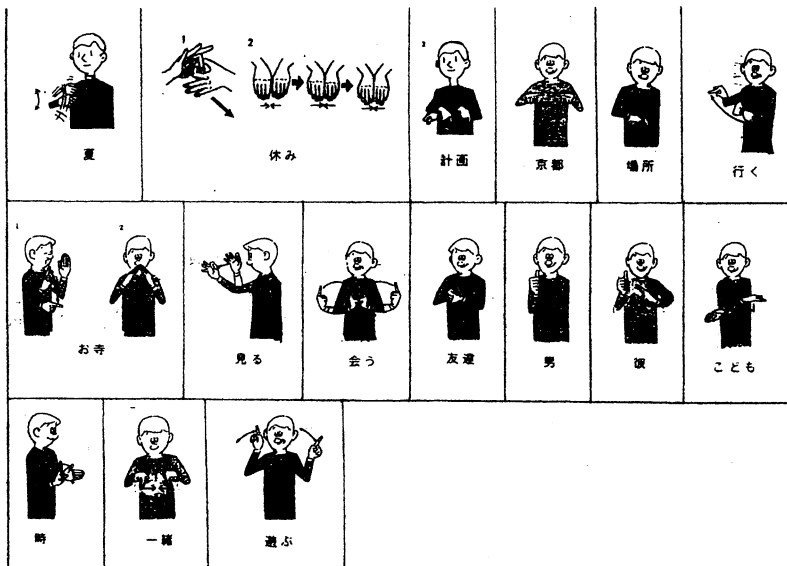


図3-1. 日本手話で表現された文例

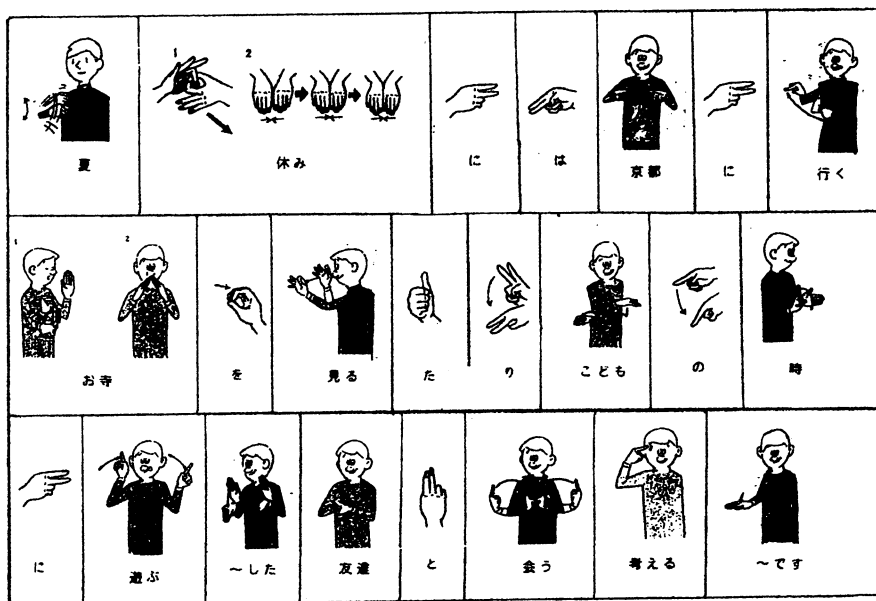


図3-2. 音声日本語対应手話で表現された文例

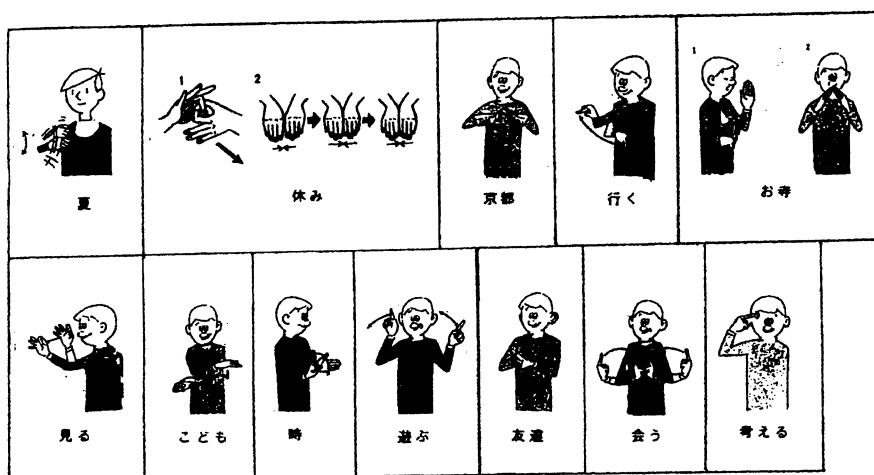


図3-3. 中間型タイプで表現された文例

注

- (1) 手話の言語特性については、本名信行、加藤三保子「手話—もうひとつの言語」、『異文化理解とコミュニケーション』で詳しく述べられている。
- (2) 1880年にイタリアで開催された「ろう教育者国際会議」において、純粋口話法が採択されて以降、

欧米ではろう学校での手話使用を厳しく禁止し、音声言語最優先の時代が始まった。日本もこの影響で1925年ごろからろう教育が口話主義一色となり、日本語発話のスキルをのぼすことが最優先された。

参考文献

- 加藤三保子, 本名信行 (1998): 「手話言語学」, 『手話通訳の理論と実践』, 全日本ろうあ連盟
- 木村晴美, 市田泰弘(2000): 「ろう文化宣言」, 『ろう文化』, 青土社
- 酒井邦嘉 (2005): 朝日新聞, 2005年3月15日朝刊
- 田上隆司, 森明子, 立野美奈子 (1980): 『手話の世界』, 日本放送出版協会
- 本名信行, 加藤三保子 (1994): 「手話—もうひとつの言語」『異文化理解とコミュニケーション』, 三修社
- 正高信男 (2001): 「言語の獲得に聴覚は不可欠か」, 『日経サイエンス』, 2001年9月号
- 米川明彦, (2000): 『手話ということば』, PHP新書
- Laura A. Pettitto, Robert J. Zatorre, Kristine Gauna, E.J. Nikelske, Deanna Dostie and Alan C. Evans, (2000): "Speech-like Cerebral Activity in Profoundly Deaf People Processing Signed Languages: Implication for the Neural Basis of Human Language" in *Proceedings in National Academy of Science*, Vol.97

*図のイラストは、『わたしたちの手話』（全日本ろうあ連盟出版局）から引用した。